（この特集は５回続き）
６日付　大船渡市、釜石市
７日付　大槌町、山田町
８日付　宮古市
９日付　岩泉町、田野畑村、普代村、野田村、久慈市、洋野町

スマホ・ＰＣで動画公開　９日全面公開

陸前高田市の東日本大震災の犠牲者の行動を再現したサイトのデモ動画は、パソコンやスマートフォンで見られます。スマホのサイトは２次元バーコード（ＱＲコード）からアクセスが可能です。パソコンは岩手日報社ホームページの震災特集ページ（http://www.iwate-np.co.jp/311shinsai/shinsai_top.html）からアクセスできます。９日には角度や場所を自分で操作できる特設サイトを全面公開します。

忘れない

犠牲者の行動記録

①陸前高田市

震災5年

東日本大震災で県内最多の死者・行方不明者が出た陸前高田市は、市内の広範囲に津波が押し寄せた。岩手日報社が遺族から聞き取った犠牲者の行動を首都大学東京の渡辺英徳准教授の研究室が再現した結果、四方から低地にある避難所を目指す人が多い傾向が見られた。遺族が亡くなった大切な人を思って証言したデータは、「少しでも高い場所へ逃げる」という教訓を訴えかける。【本記1面】

危険な低地の避難所

広田湾に面して平地が広がる陸前高田市中心部。津波は平地の広範囲を襲い、気仙川を遡上（そじょう）した

陸前高田市　広田湾に注ぐ気仙川が運んだ砂が延長約２キロの高田松原を形成し、背後に広大な平地が広がる。東日本大震災では死者１５５６人、不明２０５人の県内最多の犠牲者を出した。中心地は高田町で、市役所や駅、体育館などの公共施設が立地。海岸線から高台まで約２キロあり、逃げ切れない恐れがあるため市街地の公共施設などを避難所に指定していた。高田松原は約７万本の松が植えられ、砂浜は海水浴客でにぎわった。津波は気仙川をさかのぼり、海に面していない竹駒町や矢作町まで達した。

陸前高田市	
人　口	1万9729人（11年3月比3492人減）
死　者	1556人
不明者	205人
関連死	46人

教訓　動きを読み解く

地震発生時の陸前高田市民体育館周辺（青は男性、赤は女性を表す）

白い屋根の市民体育館を目指して集まる市民。海側（左）から来る人が多いが、山側から向かう人も。画像奥の集まっている場所は市民会館

津波襲来時。市民体育館に避難した多くの市民が津波にのまれた

海 ←→ 山

陸前高田市の最大の特徴は、避難所に逃げた多くの人が津波にのまれた点が挙げられる。遺族アンケートで判明した犠牲者の地震発生時と津波襲来時の位置情報を結び、行動を再現した結果、海岸近くの人はまず山側の避難所を目指したことが見えてくる。

海に近い同市気仙町の高田松原にいた松田育也さん(63)は避難所だった同市高田町の市民体育館に向かって移動を始めた。海から直線で約1キロの体育館には海側だけでなく、四方から市民が集まる。上部敏雄さん(85)は自宅よりも海側にあった市民体育館へと向かった。

上部さんの遺族は「放送で津波の大きさがはっきりしていれば、山の方向に避難したかもしれない」と心情を吐露する。市民会館や公民館など平場の避難所にも多くの人が入る様子が分かる。

これらの動きは、行政の避難所設定の課題を突きつけている。建物が並ぶ震災前の高田町では、これらの建物は海から離れている感覚だったが、実際の海抜は2〜3メートルと低かった。同市内で津波襲来時に避難先に滞在した犠牲者は11・4%で、沿岸全域（5・7%）の2倍。避難したのに命を落とした人が多かった。

地震発生時は安全な場所にいたものの、車で浸水域に入る動きも見られた。家族を迎えに自宅に戻った人がいたほか、避難誘導や災害弱者支援のため、民生委員や消防団員、警察官らの逃げ遅れもあった。

海から少し離れると、地震発生時と津波襲来時に同じ場所にいる人が目立つ。海側に比べ、内陸側の人は「ここまでは来ない」と自宅にとどまった。犠牲者の46・3%が自宅で津波に遭った。

「低地に設定された避難所」「内陸側の平地の自宅待機」とも、高台避難とは対極の動きだった。亡くなった人たちの動きは、高台避難と、想定を過信しない備えの重要性を示している。

（亡くなった人の年齢は当時）

記憶　遺族の思い

村上武夫さん（陸前高田）妻、長男、長女犠牲

安全なはず、なぜ…

陸前高田市が避難所指定していた市民体育館で家族3人を失った村上武夫さん。平地の地形を踏まえた適切な避難路確保を求める＝陸前高田市高田町

なぜ指定避難所が―。約80〜100人が犠牲になった陸前高田市の市民体育館で妻哲子さん＝当時(67)、長男寛昭さん＝同(42)、長女美佳さん＝同(39)＝を亡くした同市高田町の村上武夫さん(74)は疑問が残る。なぜなら3人の最期の場所が安全なはずの1次避難所だったからだ。

哲子さんと美佳さんは震災直後、毎年の訓練通りに自宅近くの体育館に避難。寛昭さんも消防団員として活動後に入り、被災した。

震災まで市の避難所設定に違和感はなかった。だが、津波で何もなくなった市街地を眺めると体育館の海抜は想像以上に低く、「行政が扇状地で平地が続く中心部の地形を適切に把握し、避難所を高台に設けてさえいれば多くの命が助かった」と思えてならない。

二度と同じ犠牲を生まないためにも「住民が高い場所に迷わず避難できる環境が必要だ」と避難所指定基準の厳密化、津波避難路を軸とした逃げ道の確保を求め、古里のまちづくりの行方を見守る。

焦点　気仙町・県立高田病院

患者ら身動きできず

津波にのまれ、患者や家族、職員らが亡くなった県立高田病院＝2012年、陸前高田市気仙町

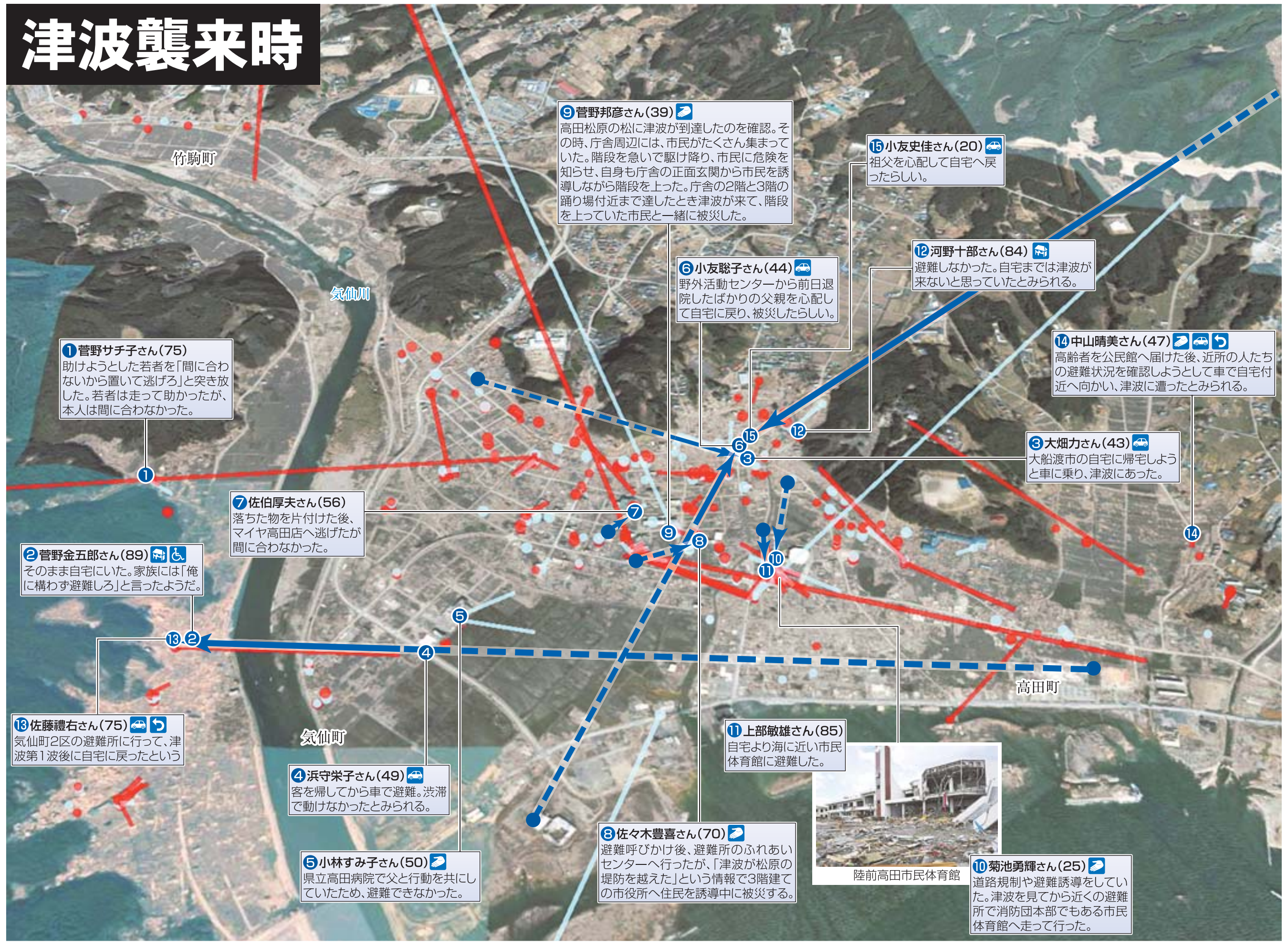
陸前高田市気仙町は県立高田病院に特徴的な傾向があった。行動を再現したイメージからは、地震発生から津波襲来まで動けない人がたくさんいた様子がうかがえる。低い土地への医療施設の立地がいかに危険かを示している。

新潟市から父親の入院手続きのため同病院を訪れていた小林すみ子さん(50)は地震発生後、父親と一緒に行動するため、避難できなかった。多くの入院患者も避難が間に合わず犠牲になった。退院が迫りながら亡くなった人もいた。

職員は患者の避難誘導に追われ、低い階層にいた人は逃げられなかった。横沢茂さん(60)は患者や家族のほか、避難してきた地域住民も誘導していた。

気仙川の右岸では、人々が避難所に向かっている様子が分かる。及川周太郎さん(93)は気仙小の校庭の車内で被災。集会所など避難所の背後には山が迫っていた。一度は避難したが、自宅に戻って津波にのまれた人もいる。

避難しなかった人の中には、避難の支援を断ったケースも。高齢者や障害がある人に見られる。菅野サチ子さん(75)は助けようとした若者を「間に合わないから置いて逃げろ」と突き放した。若者は助かったが、菅野さんは間に合わなかった。

（第３種郵便物認可）　岩手日報　2016年（平成28年）3月5日（土曜日）

広範な被災地域　公共施設へ逃げ込む人々